



被災地の妊産婦さんとみなさんをつなぐ  
**東北こそだてレター (被災地の今...)**

2015/03/17 配信 vol.31

～ 津波で母を失い、気仙沼から災禍を逃れて東京に来た方の体験談から、支援が届きにくい状況にあるということ ～

◆ **支援実績** (2014/2/28 現在)

＜支援母子数＞

- ・2015年2月計 552組
- ・プロジェクト開始より累計 19,943組 (2012/7～2015/2)

＜活動場所＞

- ・岩手 (大船渡、陸前高田、花巻、釜石、大槌、遠野、宮古、久慈)
- ・宮城 (石巻、東松島、女川、気仙沼、亶理、名取、仙台)
- ・福島 (いわき、相馬、南相馬)
- ・福島 (伊達、二本松、須賀川、白河、郡山、猪苗代町)
- ・新潟 (長岡)
- ・埼玉 (川越)・神奈川 (横浜)・東京 (中野)

＜活動内容＞

育児相談会／茶話会／ベビーマッサージ／ベビ体操／  
ママのリフレッシュ体操／親子ピクス／仮設巡回訪問

みなさま、こんにちは。 一般社団法人ジェスペールです。

また3月11日が来ましたね。あの日から4年経ちました。皆様はどんなお気持ちで311を迎えましたでしょうか。

今なお多くの方が避難生活を送られているとのこと。このような方々の生活が充実した状態になるよう祈りたいと思います。

さて、今回は、3年半に渡る活動が評価された『まんまる』の情報と、中野区で行われた「3・11のつどい」で語られた、芳賀唯未さんの体験談をご覧ください。

芳賀さんは様々な事情が重なり公的な支援が届きにくかった方ではないかと思われそうですが、そのような状況の方がどのような苦労をされたのかが体験談ではよくわかります。

◆ 『まんまる』住友生命のプロジェクト震災復興応援特別賞を受賞

[http://www.sumitomolife.co.jp/about/csr/community/mirai\\_child/child/2014/](http://www.sumitomolife.co.jp/about/csr/community/mirai_child/child/2014/)

ジェスペールが支援する、東北沿岸部を支援する助産師グループ『まんまる』が、住友生命の未来を強くする子育てプロジェクト震災復興応援特別賞を受賞し、2/23に授賞式を終えました。

「未来を強くする子育てプロジェクト」は、地域において、子育て環境づくりに取り組む団体や個人を表彰するものです。過去、ジェスペールでも未来賞を受賞しています。

住友生命は子育て支援と震災支援に力を入れている会社で、東京里帰りプロジェクトに助成していただいたこともあります。

『まんまる』は2011年9月から活動を行っていますが、長期間にわたる地道な活動が評価されました。

震災から4年を過ぎ、支援団体が支援を終了させる中、活動開始時と変わらず支援を行う『まんまる』の活動は注目を集めています。

今月、岩手日報の「ひと欄」に、代表の佐藤美代子さんが取り上げられました。

紙面の中で佐藤さんは、「お母さん一人一人を大事にする場を作りたい。出産や子育ての大変さを受け止め、頑張らなくても認めてくれる存在だ」と述べています。

先日は活動に使用している車が故障し、多額の修理費を支払って修理をすることになりましたが、そのような数々の困難にもくじけることなく、活動開始時の志を貫いています。

ジェスペールは今後も、『まんまる』を支援して行きます。

◆ 津波で母を失い、気仙沼から災禍を逃れて東京に（芳賀唯未）

今回ご紹介する芳賀唯未さんは、気仙沼で被災し、直前まで一緒にいたお母さんが津波の被害に遭われ、着の身着のまま東京に避難してきたご家族です。

震災後 2 人目のお子さんを東京でご出産されましたが、残念ながらその時は私たちの支援を届けることはできませんでした。

昨年 3 人目の妊娠時に、やっとジェスパールを知り、松が丘助産院でご安産されました。



支援を頼む親せきもなく、ご主人も正規の仕事に就くのは困難な中※、親子 5 人明るく暮らしていっています。

※東京に避難されている多くの方々が同じ状況で不安定な生活を余儀なくされています

\*\*\*\*\*

2011 年 3 月 11 日、家族で気仙沼に住んでいた唯未(ゆみ)は、東日本大震災が起こったその時に海辺の家から病院を受診するために、高台にある気仙沼市立病院に向かう車の中にいました。

長男の生後 9 か月になる龍太郎が心臓の雑音を指摘されていたため、偶然にも午後 3 時に循環器科に予約が入っていたのです。

母(文恵)は私と龍太郎を車で病院まで送ってくれたあと海辺の店(古本屋)に引き返しました。病院は高台にありますが、自営で営業している古本屋でたくさんの本が崩れ落ちているのではないかと心配し、すぐに引き返したのです。そこで母と別れたのが母の姿を見た最後でした。

その後病院を受診すると、こんな時によく来たと言われ医師に驚かれました。病院ではテレビがついており、テレビから自宅の近くにある立体駐車場が映し出され津波が押し寄せていることがわかりました。

病院のそばに仕事場があった夫も病院まで逃げて来ることが出来て、親子 5 人病院で 1 泊したのですが、テレビを見ながらも、頭の中は凍りついたようになっていて何も考えることが出来ませんでした。

龍太郎は、卵アレルギーがあったのですが、どうしても食べるものがないときに卵が入っているような蒸しパンをもらい、他に食べるものがなく私と龍太郎で食べたら案の定、嘔吐と下痢がひどく出てしまい、本当に困りました。紙おむつも限りがあり何度も下痢をするので大人用の尿とりパットを見つけてそれに対応しました。

次の日に市立高校に移りそこが避難所になっていて、そこで 2 泊しました。弟は高校 3 年生だったので同級生と卒業の打ち上げ会をしていてクラス全員が助かりました。友人の家に避難していることがわかりました。

線路を伝って中学校まで行くとそこに中学 2 年生の妹が友人と一緒にいて再会できました。そこで父とも会うことができました。

線路を歩いていくときに、そばに流されたアルバムがばらばらと風にめくれてどなたかの家族の笑顔が映し出されていたのが印象的でした。

中学校も避難所になっていました。中学生たちは自分たちも着の身着のままなのに、お年寄りのお世話をして過ごしていました。

そこから 3 月 14 日に家の近くの市民会館に行きました。母はどこにもいなくて、いろんな人に聞きましたがどうしても見つかりませんでした。

その市民会館は家のそばで、数メートル先に家があったのですが、津波が来た場所までは瓦礫の山になっていて、立ち入り禁止でした。その場所からほんの 200 メートルぐらいなのに、とても危険で入っていくことはできず、母を探すことはできませんでした。

食べ物は、父が震災直後まだ津波が来る前にすぐに買い物に走りましたが、たどり着く前に後ろから津波が来てやっとのことで逃げ切ったのです。父は食べ物を手に入れようとしたのですがそれはかないませんでした。

食べ物は避難所でもらう乾パン、近隣のスーパーからの差し入れ、叔母の家の冷蔵庫の残り物などしかなく、食べるものも底をついてきてスーパーのお菓子や果物が重油まみれになっているのを拾い空腹をしのぎました。

この時も気仙沼はずっと火事の痕の火がくすぶっていました。

母は見つかりませんでしたが、探しに行くこともできず、家族6人で母の妹の夫の実家が井戸とプロパンガスが大丈夫と言うことで、2泊させてもらいました。

9か月の赤ちゃんを抱えているので、避難所では暮せませんでした。でもこのお宅でも家族6人が長い間暮らすことは迷惑で、2泊だけしてガソリンがあるうちに気仙沼を出ようと仙台にある父の兄の家に行きました。

しかしこの叔父の家も津波こそ来ていませんが、地震の被害でガスが出ない、下水も流れないため申し訳なく、1週間だけお世話になりました。

夫が東京出身だったこともあり、周りから東京に行けば何とかなるから若い夫婦はとにかく東北を出たほうが良いと勧められました。当時私は23歳、夫は29歳でした。

幸い東京行き的高速バスが走るとのことで、そのバスに乗ろうとしましたが、片道8千円のバス代を出すのは本当に苦しかったのです。二人で持っている小銭も底をついてきており、銀行から預金を引き出すこともできず、手持ちの小銭と父からもらったお金と、友人から借りてやっと集めました。

3月22日に高速バスに乗って東京にたどり着き、板橋区にあった夫の元の同僚の家にお世話になりました。その家は犬と猫が何匹もいてトイレが決まっていなくて、あちこちに犬と猫がおしっこやウンチをしていて、花粉もちょうどひどくなってくる季節でくしゃみと涙が止まりませんでした。

この家に着いた次の日すぐに3月23日に板橋区役所に相談に行き、都庁を紹介されて都営住宅の入居を申請しました。

この夫の友人宅にいるときに母の死が確認できたと連絡が入りました。その時に部屋で、夕方まで何も考えられず、思考が止まったようになりました。夫が帰ってきて、それを伝え大泣きしました。その時、夫の顔が異様に青白くなっていたのを覚えています。

そしてその後はもう決して泣くのはやめようと決意し、それから全く泣いていません。母が亡くなる直前まで一緒にいたのは自分なのに、どうして逃げてと言えなかったのかと、いつもいつも思い、母が死んだのは自分のせいだとずっと自分を責め続けていました。

母は、その日の朝妹と言い争いをし、遺体が見つかったときに妹の好きな<嵐>のCDを持って亡くなっていたんです。きっとこれだけは持ち出したいと、妹の好きなCDを持ち出さなければという思いが強く伝わってきました。他にいくらかでも貴重なものがあるのに最後に妹と争ったことが心に残っていたんです。

都営住宅に申請してから1週間ぐらいして入れることが決まり、4月1日に今住んでいる都営住宅の入居説明会にきました。この団地にはその時から多くの避難者が来て、今も入居しています。

その時の説明会で出してくれたお弁当を、都営住宅の部屋で家族だけで食べたときに、もう移動しなくてよいと安心して食べることが出来たのを忘れることが出来ません。

全く何も無い状態からの出発でしたが、都営住宅の自治会長さんが中心となり被災者に様々な家財道具を提供してくださいました。そのおかげで親子5人やっと落ち着いて暮らし始めることが出来ました。

その年の10月に、土葬にされていた母が火葬されました。気仙沼に住んでいた叔母が遺体を確認し掘り起し火葬されたのです。

それまで母が亡くなったことがどうしても実感できませんでしたが、お骨に直面してやっと母が亡くなったことを実感することができました。



自分のせいで母が亡くなった、きっと親せきの人に会うと責められると思っていましたが、お婆さんは私に会うと「唯未ちゃん、孫も見せてやれて、親孝行したんだよ、最後まで一緒に入れて天国で喜んでよ」と言ってくれて、それを聞いて大泣きしました。

お骨に対面するまで、津波や瓦礫、母の死、気仙沼の町の火事の光景を毎日毎日、夢に見てうなされていました。母のお骨に対面してから夢を見ることなくやっと夜ぐっすり眠れるようになりました。母はその時まで 46 歳でした。

2012 年 3 月には、2 人目の子ども胡桃(くるみ)が生まれ、2014 年 8 月 8 日に次男の慶次郎が生まれました。

次男の妊娠の時にジェスペールを知り松が丘助産院にお世話になりました。この都営住宅に何人か東京里帰りプロジェクトでお世話になった親子がいてこの活動を教えてもらいました。

夫はまだ正規職員にはなれず、まだまだ生活の不安はありますが、震災から何度も住居を変え、今ここに落ち着くことが出来てほっとしています。

#### ◆ プロジェクト応援のお願い

ジェスペールの「東北こそだてプロジェクト」は、被災地の母子を支援する助産師の活動を支援しています。

皆様からいただいた温かいご支援は活動の原動力となっています。

被災地の母子を今後も継続してサポートしていくため、妊産婦支援に関するお志を同じくするお知り合いの方がいらっしゃいましたら、ぜひ下記サイトをご紹介ください。

<http://tohokumama.org/donation/>

また、皆様からの励ましのお声も、現地の助産師や被災地で子育て中のお母さん、ジェスペールメンバーの力になります。ご寄付いただく際に励ましのお言葉を添えていただいたり、当メールマガジンへのご感想などをお寄せください。



**発行者：一般社団法人ジェスペール**

公式ホームページ：<http://tohokumama.org/>

Twitter：<https://twitter.com/tohokumama>

お問い合わせ先：[info@tohokumama.org](mailto:info@tohokumama.org)

Facebook：<http://www.facebook.com/tohokumama>

